



# 巻頭言

## 一冊の小説との出会い

さいたま市教育委員会  
総括監(兼)管理部長

田口和雄

私の書棚には、すっかり日に焼けてしまった一冊の小説があります。この本との出会いは、43年前の中学生のときでした。それまで小説の話などしたことのない親友から、強く薦められて読んだ本でした。

その作品は、石原慎太郎都知事の若い頃の作品で「青年の樹」です。後に映画化もされ、話題になった作品でした。主人公の「坂木武馬」の若者らしい痛快な生き方に、私は、大きな衝撃を受けると同時にあこがれを抱きました。夢中で読み進んだことを、今も思い出します。そして、少なからず、私の青春に影響を与えました。その後、折節に自分の生き方を、主人公「坂木武馬」に投影もしていました。

余談になりますが、この本には、さらに因縁のようなものも感じています。実は、中学校を卒業してから何年か経って、ふと入った古本屋で、偶然「青年の樹」の題名の本を見つけました。手にとって開いてみると裏表紙に親友の名前が書いてあったのです。まさに、あの時私が読んだその本でした。もう、この本を元に戻す気にはなれませんでした。以来、何度か引越もし、様々な環境の変化がありましたが、ずっと私の書棚にあります。

人生には、人それぞれに、生き方に影響を与えるものとの出会いがあります。私の場合は、それが一冊の本でした。言ってみれば、この小説が、私の青春の、そして人生の道しるべになりました。どんなことであれ、人それぞれの、心が動かされる出会いを大切にしたいものです。